

3.11を
心に刻んで
2020

岩波書店編集部編

目次

I 3・11を心に刻んで

5

二〇一九年三月一日……嘉指信雄(6)

ドリアン助川(8)

三浦しをん(10)

四月一日……工藤律子(12)

羽田貴史(14)

五月一日……中寫哲演(17)

村上稔(19)

六月一日……青木美希(21)

上西充子(24)

七月一日……沢山美果子(26)

松元ヒロ(28)

八月一日……永田浩三(30)

永野のりこ(32)

九月一日……花田昌宣(35)

渡部義弘(37)

一〇月一日……木下史青(40)

島田 恵(42)

十一月一日……岩根 愛(44) 佐藤文隆(46)

十二月一日……今村久美(48) 谷 賢一(51)

二〇二〇年一月一日……川野里子(53) 藤田直哉(55)

二月一日……杉田 敦(58) 山口幸夫(60)

執筆者紹介……………62

II 知られざる在宅被災者 河北新報社……………63

制度のはざま(64) 健康不安(66) 災害ケースマネジメント(69)

カルテ(71) インタビュー(73) 九年目の冬に(75)

III 3・11を考えつづけるためのブックガイド……………79

青木美希(80) 赤坂憲雄(81) 岡田秀則(82) 川崎哲(83)

沼野恭子(84) 吉田千亜(85) 若松丈太郎(86) 鷺谷いづみ(87)

*本書は、岩波書店ホームページでの連載「3・11を心に刻んで」をまとめⅠとし、Ⅱには、「河北新報」の記事の加筆版を、Ⅲには書き下ろし「3・11を考えつづけるためのブックガイド」を収録、一冊とした。

*Ⅰの初出である連載は二〇一一年五月一日号を初号として、書籍などから言葉を引き、その言葉に思いを重ねて毎月三名、二〇一九年四月からは二名の筆者により執筆されている(<https://tanemakiwanami.co.jp>)。初号から二〇一二年二月一日号までの全一〇回分は『3・11を心に刻んで』として、二〇一二年三月一日号から二〇一三年二月一日号までの全一二回分は岩波ブックレット『3・11を心に刻んで2013』として刊行された。以後毎年同様に、一年間分の連載を岩波ブックレットに収録している。

*本書には、同連載の二〇一九年三月一日号から二〇二〇年二月一日号までの全一二回分をおさめた。各エッセイ末尾の日付は、初出時の掲載号を示している。

*Ⅰ、Ⅱ、Ⅲともに、文中の役職、肩書き、年齢は、執筆・取材当時のものである。

岩波書店編集部

I

3. 11 を心に刻んで

嘉指信雄

原発さえなければ……

(二〇一二年六月、福島県相馬市で酪農を営んでいた五〇代の男性が首をつつて自死する前に、堆肥舎のベニヤ板の壁にチョークで書き残した言葉の一部)

* * *

これは、映画『遺言 原発さえなければ』(二〇一四年)のタイトルにも使われている言葉だが、共同監督の豊田直巳さんは、イラク戦争などの取材でも知られるフォトジャーナリストだ。わたし自身、イラク戦争開始直前の二〇〇二年一二月、豊田さんをガイドとした市民調査団の一員としてイラクを訪れてから、劣化ウラン(DU)弾禁止運動に取り組むようになった。しかし、その活動のあり方は、福島第一原発事故によって一変せざるをえなかった。ほかの多くのNPO関係者同様、「広島・長崎からイラクへ」と向かっていた眼差しは、日本で起きてしまった深刻な原発事故の現実を引き戻された。

イラク戦争開始からちょうど一〇年が経った二〇一三年三月、イラクのバスラでがんの治療や

DU汚染調査に携わってきたジャワッド・アル＝アリ医師などとともに、やはり豊田さんにガイドされ福島を回る機会があった。その折り、アル＝アリ医師は、帰還困難区域とされていた飯館村・長泥地区で測った放射線量の高さに、「バスラと比べても、桁違いだ！」と驚きと不安の表情を隠さなかった。

東海村JCO臨界事故（一九九九年九月）のあと、高木仁三郎は、末期がんと闘いながら書き残した『原子力神話からの解放——日本を滅ぼす九つの呪縛』（光文社、二〇〇〇年／講談社、二〇一一年）などのなかで、事故が起きれば取り返しをつかない原子力発電は、失敗が許されない、つまり、可謬主義^{かびゅう}には立てないという意味において、従来の科学・技術とは全く異なるのだ、と警告している。また、福島在住の詩人・若松丈太郎は、「記憶と想像」（二〇一一年八月、『詩集わが大地よ、あ』土曜美術社出版販売、二〇一四年所収）のなかで、「わたしたちは福島の核災がまだ終熄していないことを知っている／……／わたしたちは二百万年のちの人類がどう生きるかを知らない」と記し、核災^{核災}が及ぼす影響の、人間的尺度を超えた長さ^{長さ}と責任を問いかけている。

今改めて、核問題の有りように思いをいたす——「原発さえなければ……」と繰り返さないために。

（二〇一九年三月一日）

ドリアン助川

「もしそのような庄屋がおればたちどころに庄屋取り潰し、家屋田畑召し上げて、久留米領からの所払いを命じるところだった」

このひと言は、音のない稲妻のように、各庄屋の耳を震えさせた。

（帯木蓬生『水神』新潮文庫）

* * *

日本人は「侍」が好きだ。実際に目の前にいたらたぶんいやな人たちであるのに、刀を提げたその姿にも、サムライという響きにも鼻の穴をひろげて陶醉する。だから、他国と闘う兄さんたちは「侍ジャパン」とか「サムライブルー」などと呼ばれる。テレビのアナウンサーも喜び声で「侍ジャパン」を連呼する。するとみんな、「わしらもご先祖様に侍を持つジャパンの一員じゃもんね」という気分になり、外国何するものぞと妙な雄叫びをあげたりする。

だが、おじさんが夢を壊して悪いけれど、「侍ジャパン」じゃ、日本人の平均的な気質は語れんのよ。明治三年の新政府の統計によれば、華族、士族、卒（元下級武士）の合計は全体の六〇七

パーセント。侍がいた頃の日本人を語るなら、残念なことにだいたいの方は「侍じゃなかったジャパン」なのだ。

帚木蓬生さんの『水神』は、侍じゃなかったジャパンの奮闘を描いている。水不足に悩む農民たちが、運河を作り、川から水を引くことを命がけでお上に要望する。作ってもいいよとお上は認めるが、でも働くのはお前らだぞ、農民を差し出さない庄屋がいたらどうなるかわかつてるだろうなと奉行に脅され、みんなでしーんと静まり返るのである。

これ、ジャパンだよ。辺野古を埋め立てられても、騒ぐ人たちのほうがおかしいよと知らぬ顔をするジャパンだよ。

おじさんは震災の翌年、自転車にまたがって奥の細道全行程約二〇〇キロを走破した。芭蕉が俳句を詠んだすべての地で放射線量を測り、そこで暮らす人々の声を聞くためだ。以来、被曝した山野や河川を訪れ、毎年の定点観測を始めた。そして驚いた。

線量よりも先に、みんなの怒りの声がどんどん小さくなっていったからだ。闘おうとする農家には、ことをあらだてんじゃねえと村八分をしたりする。だから結局、みんな黙ってしまった。堪えに堪えて、仕方ねえよとジャパンをしている。おじさん思うに、これじゃあ、為政者の思うつぽだよ。一揆は遠いよ。

(二〇一九年三月一日)

三浦しをん

「隣人とは〔略〕私とは別の者、等しくない者、根源的に対立をはらんだ者であり、であるが故に、この世界を豊かで光輝ある世界に変えうる存在なのです」

（奥泉光『グランド・ミステリー』角川文庫）

* * *

「多様性を尊重する」と言うのはたやすいが、実現がむずかしいことはニュースを見聞きするだけでも実感される。私たちはどうしても、自分と異なる考えや立場のひとを否定し、テリトリから排除しようとしてしまいがちだ。

けれど、もし人類全員が同じ考えを持ち、一個の生命体のように統率の取れた動きをするとしたら、と想像してみると、「気持ち悪いな」と思う。それはもはや、言葉や感情を有する「人間」とはべつの生き物だろう。やつのことではのかな共感が生まれるときの喜びも知らず、大きな危機に臨機応変に対処することもできない、なにか哀れな生き物だろう。

悲しく理不尽な出来事に直面して、それでもなお、互いを思いやり、助けようとし、なんとか